

水族館って、不思議な場所だと思います。子どもの頃に家族で行った思い出がある人も多いでしょうし、大人になってからもデートや旅行の途中でふらりと立ち寄ることがありますよね。何度訪れても楽しいし、また行きたくなる。そんな魅力のある場所です。

でも、水族館の魅力って何だろうと考えると、単に魚がいるだけではない気がします。私はよく、水族館は「入口」だと言っています。魚のことを知る入口。海に興味を持つ入口。自然と出会う入口。そして、まだ知らない世界へつながる入口です。水族館には、そのきっかけがたくさんあります。例えば、大きな水槽の前で魚の群れに圧倒される人もいれば、小さな魚の動きに夢中になる人もいます。同じ展示を見ていても、心を動かされるポイントは人それぞれです。

私が館長を務める静岡県の幼魚水族館では、魚の赤ちゃんだけを展示しています。幼魚というのは、一般的な水族館ではあまり主役にならない存在です。小さいし、見つけにくい。昔から「展示には向かない」と言われることもありました。

でも実際に展示してみると、面白いことが起きました。幼魚は小さいから、お客さんが自然と水槽に顔を近づけます。そして、一匹一匹をじっくり観察するようになります。「あれ、こんな顔をしていたんだ」「こんな泳ぎ方をするんだ」そんな発見が次々と生まれます。大きな魚を遠くから眺めるのとは違う、小さな一匹と向き合う時間がそこにはあります。これは、お客さんが教えてくれたことでした。水族館には、こうした発見がたくさんあります。

魚をよく見ていると、それぞれ全く違う生き方をしていることに気づきます。海面近くを泳ぐ魚もいれば、海底で暮らす魚もいる。小さなプランクトンを食べる魚もいれば、大きな獲物を追いかける魚もいる。見た目も違えば、生き方も違う。でも、それぞれが自分の居場所で生きていて、その多様な存在が海の世界を成り立たせています。私は、人間同士が衝突する理由の多くは「違い」にあると思っています。でも海の世界を見ると、違うことが当たり前です。形も色も、生き方もまるで違う。それでもみんな生きている。

そういう世界を見ていると、人間社会の見え方も少し

変わる気がします。だから水族館は、生きものを展示する場所であると同時に、多様性を学ぶ場所でもあると思っています。

私が周囲の人たちによく問いかけていたのが、「なぜ水族館は必要なのか」ということでした。私なりにたどり着いた答えは、「海を凝縮して見せてくれる場所だから」です。本来なら同時に見ることのできない世界を、一つの空間の中で見ることができる。

表層の魚も、海底の魚もいる。日本の海もあれば、遠い外国の海もある。それぞれがどのようにつながり、どんな環境の中で生きているのかを知ることができる。水族館は、海という巨大な世界を分かりやすく見せてくれる場所なのです。そして、そこからさらに興味が広がっていく。

入口は何でもいいのです。まず心が動くことが大切なのです。

最近では環境問題や地球温暖化について語られることが増えました。でも、「海が変わっています」と言われても、なかなか実感できない人も多いと思います。そんなとき、水族館は大切な役割を果たします。生きものと出会い、

その暮らしを知り、海の変化を感じる。そうした体験を通して、環境のことを自分事として考えられるようになるからです。知識だけでは人はなかなか動きません。まず好きになること。興味を持つこと。そこから学びが始まります。だから私は、水族館を「ワンダーへの入口」だと思っています。

海の中は不思議だらけです。深海の生きものだけではありません。漁港の足元を泳ぐ小さな魚にも、驚くほど面白い世界が広がっています。そして、その不思議に出会った瞬間、人の心は動くのです。

だから水族館は、何度でも行きたくなる場所なんだと思います。行くとたびに新しい発見があり、行くとたびに新鮮な驚きがある。そして、その先にはもっと広い海の世界が待っています。

最近、水族館に行っていないという人がいたら、ぜひ足を運んでみてください。きっとそこには、まだ知らなかった生きものとの出会いがあり、心を躍らせる発見があるはずです。水族館は、海への入口であり、世界への入口でもあるのです。

幼魚水族館のアイドル、コガシラエビス（写真：松田明浩）

特集

五感に響く水族館

心躍る水族館—— MESSAGE ワンダーへの入口として



鈴木 香里武
SUZUKI Karibu

プロフィール

1992年3月3日生まれ、うお座。幼少期から魚に親しみ、専門家との交流や様々な体験を通して魚の知識を蓄える。大学院で観賞魚の癒し効果と稚魚の生活史を研究。海の学び舎「カリブの学港」の港長を務め、岸壁幼魚採集家として漁港に現れる稚魚・幼魚を観察する。メディア・イベント出演、執筆等の発信活動をする傍ら、水族館のイベント・展示企画等、魚の見せ方に関するプロデュースも行う。2022年7月に幼魚水族館をオープン。館長を務める。筑波大学生命環境系客員研究員。著書に「水の世界のひみつがわかる！ すぐすぎる海の生物の図鑑」(KADOKAWA)等。